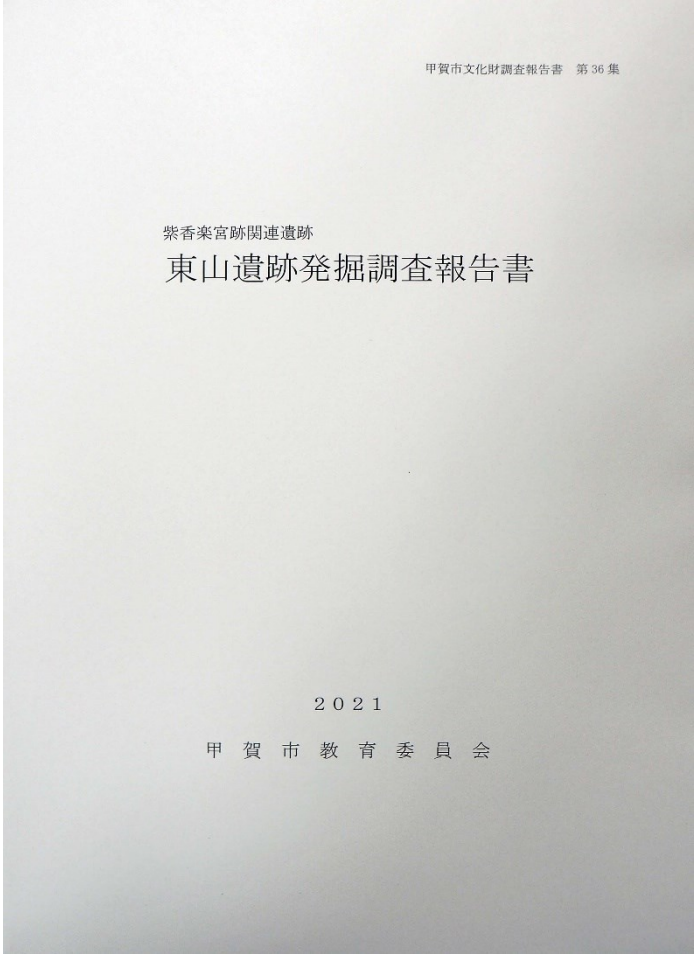
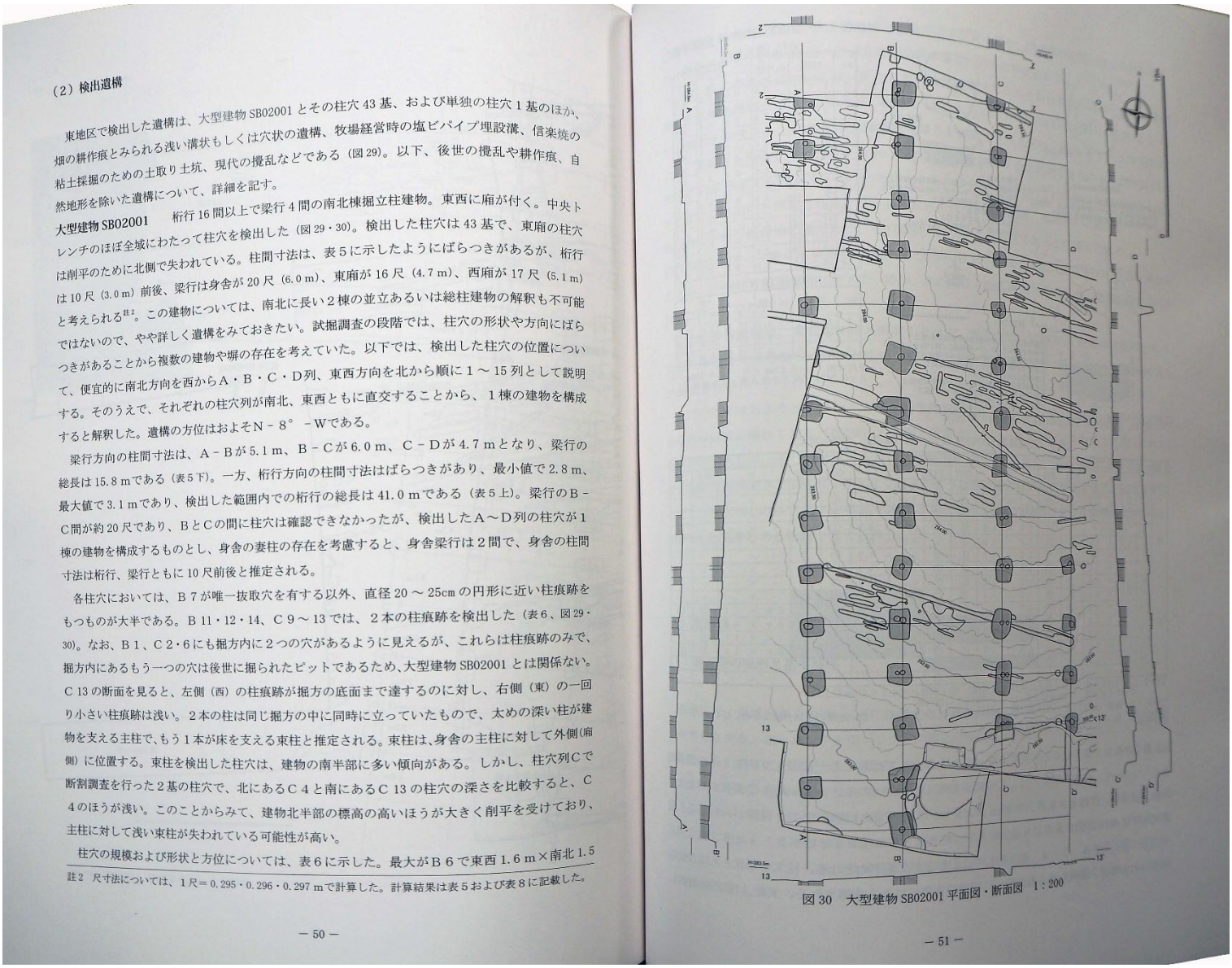
紫香楽宮跡関連遺跡

東山遺跡発掘調査報告書

1部　1，000円

　紫香楽宮跡関連遺跡で行われた最新の発掘調査成果をまとめた１冊。東山遺跡は、甲賀寺跡と推定される史跡紫香楽宮跡内裏野地区と同じ丘陵上に立地し、鍛冶屋敷地区に隣接する。発掘調査では東西 15.8m×南北 41m以上の大型掘立柱建物などを検出し、紫香楽宮跡の遺構の広がりを考える上で重要な調査成果となる。





（2）検出遺構

東地区で検出した遺構は、大型建物 SB02001 とその柱穴 43 基、および単独の柱穴 1 基のほか、畑の耕作痕とみられる浅い溝状もしくは穴状の遺構、牧場経営時の塩ビパイプ埋設溝、信楽焼の粘土採掘のための土取り土坑、現代の攪乱などである（図 29）。以下、後世の攪乱や耕作痕、自然地形を除いた遺構について、詳細を記す。

大型建物 SB02001　桁行 16 間以上で梁行 4 間の南北棟掘立柱建物。東西に廂が付く。中央トレンチのほぼ全域にわたって柱穴を検出した（図 29・30）。検出した柱穴は 43 基で、東廂の柱穴は削平のために北側で失われている。柱間寸法は、表５に示したようにばらつきがあるが、桁行は 10 尺（3.0 m）前後、梁行は身舎が 20 尺（6.0 m）、東廂が 16 尺（4.7 m）、西廂が 17 尺（5.1 m）と考えられる[註2]。この建物については、南北に長い２棟の並立あるいは総柱建物の解釈も不可能ではないので、やや詳しく遺構をみておきたい。試掘調査の段階では、柱穴の形状や方向にばらつきがあることから複数の建物や塀の存在を考えていた。以下では、検出した柱穴の位置について、便宜的に南北方向を西からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ列、東西方向を北から順に１～15 列として説明する。そのうえで、それぞれの柱穴列が南北、東西ともに直交することから、１棟の建物を構成すると解釈した。遺構の方位はおよそＮ－８°－Ｗである。

梁行方向の柱間寸法は、Ａ－Ｂが 5.1 m、Ｂ－Ｃが 6.0 m、Ｃ－Ｄが 4.7 mとなり、梁行の総長は 15.8 mである（表５下）。一方、桁行方向の柱間寸法はばらつきがあり、最小値で 2.8 m、最大値で 3.1 mであり、検出した範囲内での桁行の総長は 41.0 mである（表５上）。梁行のＢ－Ｃ間が約 20 尺であり、ＢとＣの間に柱穴は確認できなかったが、検出したＡ～Ｄ列の柱穴が１棟の建物を構成するものとし、身舎の妻柱の存在を考慮すると、身舎梁行は２間で、身舎の柱間寸法は桁行、梁行ともに 10 尺前後と推定される。

各柱穴においては、Ｂ７が唯一抜取穴を有する以外、直径 20 ～ 25cm の円形に近い柱痕跡をもつものが大半である。Ｂ 11・12・14、Ｃ９～ 13 では、２本の柱痕跡を検出した（表６、図 29・30）。なお、Ｂ１、Ｃ２・６にも掘方内に２つの穴があるように見えるが、これらは柱痕跡のみで、掘方内にあるもう一つの穴は後世に掘られたピットであるため、大型建物 SB02001 とは関係ない。Ｃ 13 の断面を見ると、左側（西）の柱痕跡が掘方の底面まで達するのに対し、右側（東）の一回り小さい柱痕跡は浅い。２本の柱は同じ掘方の中に同時に立っていたもので、太めの深い柱が建物を支える主柱で、もう１本が床を支える束柱と推定される。束柱は、身舎の主柱に対して外側（廂側）に位置する。束柱を検出した柱穴は、建物の南半部に多い傾向がある。しかし、柱穴列Ｃで断割調査を行った２基の柱穴で、北にあるＣ４と南にあるＣ 13 の柱穴の深さを比較すると、Ｃ４のほうが浅い。このことからみて、建物北半部の標高の高いほうが大きく削平を受けており、主柱に対して浅い束柱が失われている可能性が高い。

柱穴の規模および形状と方位については、表６に示した。最大がＢ６で東西 1.6 m×南北 1.5

註2　尺寸法については、１尺＝0.295・0.296・0.297 mで計算した。計算結果は表５および表８に記載した。

― 50 ―

図 30　大型建物 SB02001 平面図・断面図　1：200

― 51 ―